
世界一の王とハッピーアイランド物語

トム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界一の王とハッピーアイランド物語

【Nコード】

N8962P

【作者名】

トム

【あらすじ】

美しい街並み。

青い空にきれいな砂浜。

そこで俺達5人は2泊3日の最高の思い出を作る予定だった。

船の上でも何しようか、おみやげはどうすると楽しそうな会話が続いた。

だがそれもこの一言が聞こえるまでだった。

前方に座礁。左に回避。

急に船員たちの動きがあわただしくなり、

その後聞こえた大きな音と、船の揺れ。

人々の悲鳴と船員たちの絶望の声。

ああ、なんでこうなってしまうんだろう。

そう思った時もう船は沈みかけていたのだった。

第1話 最悪の状況

波打つ砂浜と、広い青空。

そこで目が覚めた織田拓也。

重い体を起こすとそこにいたのは4人だけだった。

4人とも表情が暗く、とても楽しそうには見えなかった。

こんなところに来た覚えがない拓也は気まずそうな雰囲気を見て夢なら早く覚めてほしいと思った。

しょうがなく体を動かす。

が、なぜか思うように動けなかった。

そんな様子を見た女の子がひとり、近寄ってくる。この女の子は20歳の徳川薫。

「たっくん、まだ駄目だよ、体動かしちゃ。」

「どういこと?」

と拓也が聞き返すと、女の子は重い口を開いた。

「私たち、旅行に来たんだよね?」

この一言で拓也は思いだす。

「ああ、そうだったな。で、なんでこんなところにいるんだ？
早く目的地に行きたいよ。」

「え？覚えてないの？まあ、当然か・・・。
最悪の事態だったもんね。」

「はあ？お前、何言ってるの？」

この2人のやり取りはきりがつかないと判断したのか他の3人もや
ってくる。

「船が座礁したんだよ。」

そう言ったのは、20歳の武田慎だった。

「はあ？お前たちまで何言ってるんだよ？」

「嘘でもなんでもねえよ。記憶しつかりたどつてみる。
オレもはじめは信じれなかったけどな。」

拓也は記憶をたどる。がそんな記憶は微塵もない。

あるのは、旅行に出発した時のみんなの笑顔。

「駄目だ。全然記憶にねえや。でも、悪ふざけじゃないんだろ？」

「ここまでやってまで悪ふざけなんかするかよ。」

そう言ったのは菅原翔太。今年で22歳になる。

「で？どうすりゃいいの？」

「だからそれを話あってたんだって。」

「携帯とかはすべて水でおじゃん。食事ひとつすらない。」

拓也は記憶にはないがどうやら最悪の状況に来てしまったようだ。

ここから5人の人生は大きく変わっていくことは誰にも想像がつかなかったのである。

第2話 役割分担

1日目

時計が12時を回った。

が、時計もないこの5人達はそれすらも知らない。

5人は砂浜でどうするかを話し合っていた。

「じゃあさ、この木を燃やしてさ、それを合図にすればいいんじゃない？」

と提案したのは今年で21歳になる足利敦子だった。

それを反論するのは学年トップの秀才、菅原翔太だ。

「いや、この海域はあまり必要とされてない海域だ。つまり、船はあまり通らない。

そんな状況でへたに火をつけると、家などを立てる木や、燃やす木などがなくなる。」

それに俺たちまで立場を追われることになる。」

「じゃあ、どうしろっていうんだよ！」

そう怒るのは武田慎で、織田拓也と徳川薫はなにも言わず、見守っているだけだった。

怒る慎に、冷静な翔太はこう答えた。

「いいか？まずこういうときに大切なのはチームワークだ。
まず役割分担を決めよう。」

その冷静な対応にみんなは静かにうなづく。

それを確認した翔太はこう続けた。

「まず、決めなければならないのは、信頼できるリーダーだ。
それをだれにするかで飢え死にか、生き残るかが半分ぐらい決まる。」

そう言っていると、またもやみんなの声が入り混じり、誰が何を言っているのか分からなくなった。

「うるさいっ！黙ってくれ。」

そう言っているとみんなは黙る。リーダーはこの男しかない。

みんなはそう認識していた。

「で、リーダーをどうするかなんだけど、これは僕の推薦でいいかい？」

と言うか、できるなら僕がすべて決めたいんだけどね。」

そう言っていると今まで黙っていた薫がこう言った。

「ここはあなたに任せるわ。あなたならきつといい案があるんじゃない？。」

「まあね。」

と自信たっぷりにうなずく翔太。

「しょうがねえ。じゃお前決めろよ。」

と言ったのは慎だ。

「ん、じゃあ、決めるね。」

まず、リーダーは拓也ね。」

拓也はまさか自分がリーダーだと言われるとは思わずに聞き返した。

「オレ？」

「うん、君だね。君は学級委員だし、他に割り当てることがないんだよ。」

そう言うと拓也は顔を赤くし、みんなは笑った。

いい雰囲気だ。

「で、まず料理は薫、君に任せるよ。君はたしか料理が得意だったよね。」

それに、家などの建設、設計は慎、君だ。

あとは、敦子、きみは海担当だ。水泳部だし泳ぐのは好きだろ？で、オレは直接、みんなに指示を出す。それから山担当も務める。これでいいね？」

みんなは目を丸くしていた。ポカーンとしている状態だ。

一気に決めてしまった、ことへの驚きだった。

まさか、こんなに早く決めれるなんて。それに得意分野が生かされている。

「じゃ、分かりやすく、図を描くね。」

そう言って砂浜に文字を書き始めた。

織田拓也 リーダー

徳川薫 料理担当

武田慎 建設、設計担当、力仕事もできれば

菅原翔太 副リーダー、指示担当、山担当

足利敦子 海担当

これであとは順々にきめていけば1ヶ月くらいは多分持つ。

それと、指示をだすのは僕が決めるのは拓也だし、みんなも考えて動いてくれ。

そう言った。

まだ島での生活は始まったばかり。

第3話 島の全貌

1日目 午後2時

早くもあの話合いから2時間が経過した。

とりあいず昼ごはんを取ろうということになった、5人。

家を作ることは無人島で最優先にすべきことだ。

食料の確保は、薫と敦子と翔太の3人が担当した。

家は慎と拓也だ。

砂浜で絵を描いているのは慎だ。おおざっぱな絵を描いて説明している。

「と、言うわけで分かったか？こういう風だ。」

「でもさあ、木使うつて言ったって、木を切るものがないじゃん。」

その言葉で慎は青ざめた。

「ごもつともで……。」

と小さくつぶやく。そこに山に入って行った翔太が戻ってきた。

「設計はできたみたいだな。」

慎は翔太にこう返した。

「設計はできても、木が切れねえ。どうすりゃいいの？」

「ああ、そうか。ラッキーなことにさっき切るものを見つけたんだ。これ、使ってくれ。」

そう言って袋から取り出したものはのこぎりだった。

「ああ、まじでラッキーだな。どこでみつけたんだ、こんなもの。」

「なあに、ちよつと冒険してたらすぐ見つかった。」

それよりも問題は早く作ることだな。俺たちが戻ってきたらびっくりするような

やつ作っといってくれよ。」

そう言ってまた山の方へ歩いて行った。

拓也は不審に思う。なぜ？

なぜ、こんなところににこぎりがあるのか？

そんな疑問は慎の呼びかけによつてかき消された。

「おーい、何してるんだ？早く来いよ。」

はっとなつて慎を追っていった。

一方、山担当組は3人で散らばって動いていた。

海担当の敦子もだ。

モリがないので海に入っても集められるのは海藻と貝ぐらいなので、
入る意味がないとの

翔太の提案だった。それならこんなにもないところで、海担当は
作らないみたいだ。

それなのになぜ海担当を作った？

まるで、モリは見つかりますよと言わんばかりだった。

が、今はそんなこと考えても仕方がないので食料集めに集中した。

しかし、バラける意味があるのだろうか？

遭難したら終わりだ。もう考えないようにしていた不安が再び襲い
だす。

まるで、翔太は1人になりたいような命令ばかりを出す。

不審に思えてしょうがない。

が、やはり団結力は大切だ。

そう思い、再び食料集めに集中したのである。

第4話 夜

1日目、午後6時半

各地で動いている、誰もが空腹に襲われていた。

それは、拓也もまた然りだ。

空腹になると、怒りがこみ上げてくる。

それを必死に冷まそうとするのだが、やはり治まり切らず、地面を思いつきり蹴る。

家は今ちょうど半分が完成したところだ。

とりあえず、屋根は作れたので雨の心配は必要なくなった。

「よし、今日はここまでだ。あまり集中ができない状態で作るとただのガラクタになりかねない。」

「ああ、そうだな。」

そう言っていると、全員が戻ってきた。

みんなの顔や表情から疲れが見えた。自分では気づかないだろうが、たぶん自分の顔にも疲れは見えるのだろう。

その中でも、ひとときわ疲れていたのが、女性陣で、

疲れてなさそうな人ランキングの1位が翔太だ。

と言う、ふざけたランキングを作ってしまった拓也はそのランキングを頭の中から消した。

これだけやって集まったのが、せいぜい、きのこ山菜、それに果物くらいだった。

見たこともないので食べたくないし、そもそも食べられるのか分かっていなかった。

ここで、薫がみんなが気付いていないことを言いだした。

「ねえ、私、トイレ行きたいんだけど・・・。」

あつ。忘れていた。そう思うと自分も行きたくなってくる。

翔太は簡単に

「行ってこいよ。」

と言う。がやはり女子は激怒する。

「行ってこいつてどこによつ。まさか外でするなんて言わないでしようね。」

「それしかねーだろ。」

「嘘ー。最悪ー。」

「それは慎にでも言っとけ。」

「オ、オレですか？」

突然振られた慎は困惑した。

「しょうがねえだろ、ここには下水道なんてあったもんじゃない。作ってほしいなら下水管かなんかくれよ。」

無論、そんなものはあるはずがない。

「じゃあ、行かなくてもいいよ……。我慢する。」

と諦めた。だが、慎と拓也は気にしずに

「じゃ、俺達行ってくるから」

と声をそろえて言った。そしてそのあと草むらに消えた。

帰ってきたのは、その5分後。

薫はまだ我慢している。それは、敦子にも広がった。

「う、うちもトイレ行きたい。」

だが女性陣はトイレがないなら行かないとずっと行かずにいる。

翔太は薫の足が震えていることに気がつく。

「おいおい、まじで行ってこいよ。」

「うるさいわねっ。私たちのことも少しは考えてよ。」

「んなこと言われても、じゃずっと我慢していてください。っていう方が気持ち考えてねえじゃねえか。」

みんなが空腹による怒りをぶつける。

まだまだ、生活は始まったばかり。

第5話 分裂

2日目 午前7時

また新しい日が始まった。

今日もまぶしいくらいのいい天気で、バカンスとしては最高だ。

そう思うと余計に事故に対して腹が立つてくる。

拓也はこの日、空腹で目が覚めた。

20年程生きてきたが空腹で目が覚めることはもちろん初めてであり、

もう2度と経験したくない目覚め方だった。

いつもは、下でコーヒーなどを飲みながらゆっくりとしている時間だが

今は、朝ごはんの確保でそんな余裕はない。

みんなもいら立っているようであまりいい雰囲気ではないのは確かである。

「おはよう。」

と声をかけても返してくれるのは翔太ぐらいだ。

女子に返されなかったのはちょっとショックである。

「どうしたんだ？」

と翔太に小さな声で聞いた。翔太は、

「夜中にどうしても我慢できなかったらしい。」

「漏らしたのか？」

「んなわけねえだろ！バカ！」

そう一喝して再び話し始めた。

「だから機嫌がわりいんだよ。敦子の方もそうだろう？」

言われて、さつと敦子の表情を盗み見た。

確かに怒ってはいいるが、薫よりはマシだった。

「そういうことか・・・。」

「そういうこと。で今日の朝食は？」

「はあ？オレが決めんの？」

「なに言ってるんだ？お前がリーダーだろ。」

そうだった。オレがリーダーで引つ張って行かなきゃならない。

「んー、よし分かった。まずは食料集めだな。」

そう言つて立ち上がると、みんなで食料集めするぞ。と叫んだ。

だがみんなの反応は冷たかった。

「えー。疲れたし。」

と言つたのは薫。そうとうご立腹だ。だがこれが負の連鎖を作つてしまつた。

「そうだよ。疲れたし、行つても満足な食事手に入らないじゃない。い。」

そんなことしても無駄無駄。」

と続いたのは、敦子だった。憤も続く。

「ホントだよ。まじで昨日は何にも食べなかつたじゃねえか。せつかくこんなもんまで作つてあげたのによ。」

この様子を見た拓也は啞然とする。翔太の方をみて意見を求めた。

「ありやりや。こりやひでえな。野垂れ死にか……。」

そう馬鹿にするだけであつた。がもう一言付け加えた。

「動けるうちに動いとかないと、いずれ動けなくなるぜ。動けなくなつてから食料は探しに行けねえからな。」

そう言って海に入る準備をする。

「お前、何するんだ？」

「見てわかんねえか？海に入るんだよ。さぞかし気持ちいいぜ。」

「どうやって取ってくるんだよ？」

「昨日の夜、モリを見つけたんだ。あまりにも腹が減ってたから
1人で行ったんだよ。そしたら見つかった。」

「何——」

またもや翔太が発見した。なぜモリまでがここにあり、それを翔太
が1人で見つけた？

翔太がいつも見つけるんだ。翔太が隠してきているものを取って来
るかのように。

そして海に入って行った翔太の姿はやがて波で見えなくなったのだ
った。

第7話 不審

2日目 午前9時

翔太が海に入って行っただけからすでに2時間程が経過した。

が、状況は全くと言っていいほど変わらない。

雰囲気は悪いし、それに指示が通らないのだ。もう、嫌になってきた。はやく帰りたい。

不意にそう思った拓也である。もう、死ぬしかないのだろうか？

希望があるのは、翔太だけである。まあ、拓也も少しは・・・。

だが、あとの3人は完全にやる気を失った。下を向いている、慎と薫、泣いているのは敦子。

だが、これもしようがないと思う。島から見えた船は一切なし。

本当に一隻もないのだ。上空においても、飛行機は通らない。

助けを求めている自分たちが惨めになるだけだ。

と、ここで翔太が戻ってきた。

「おい、雰囲気暗いぞ。元氣出せって。」

普段は嬉しいその言葉も今は逆効果。みんなの反感を買う結果とな

る。

翔太を見る3人の目の冷たさがそれを物語っていた。

「どうだ？収穫は？」

そう聞いたのは、まだ生きることが少しはあきらめないでいる拓也である。

その目を見た翔太は自然と笑顔になる。

ふん、かわいそうなやつだな。最後はオレ以外みんな死ぬつてのによ。

笑顔の裏にはそんなことを思う、悪魔の翔太がいた。

翔太はその気持ちがばれないように話を進める。

「ああ、4匹獲れた。」

それに拓也は驚いた。

「4匹！？お前、こついのやったことあるの？」

「少しはね。」

拓也は、そつと翔太の耳に口をもっていき、

「誰が我慢する？」

と、小さな声で尋ねた。そしてこつ付け加える。

「オレの意見なんだが、生きる努力をしないやつに食べる権利はないと思う。」

「まあ、それもそうだが、ここはオレが我慢するよ。」

拓也は驚いた。この状況からしてみれば、食料の奪い合い、そして生き残りゲーム。

そんな感覚でいる拓也にはまったくもって理解ができない。

なぜこの状況で我慢が出来る？仲間への慰めか？

オレが我慢するから希望もってよ。そんな様にも聞こえなくはないが、拓也は別のところに目をつける。最近、翔太が不審に思えてしようにない。

（最近と言っても、遭難してから40時間程度だ。だが、長く感じていた。）

必要な物は山からホイホイ持ってくるし、特に空腹と言う様子もない。

空腹だとしたら、さすがに海へは入れないだろう。

そしてなぜか、助かるという絶対的な自信を持っているように見えた。

が食料はありがたく頂戴する。昨日、食べたのは果物だけだ。

山菜もあつたが一口食べたらもう食べたくなくなるほどまずかった。

2日目 正午

先ほどの魚はおいしかったが、少しも空腹は満たされなかった。

が、少しは雰囲気がよくなったように感じた。

これから、夜ごはんを探しに行かなければならない。

そして、この島の全景を見ておかなければならない。

どこが安全で——というより、安全な場所はないのだが……。

避難場所、そして船の生存者の確認。

ついに本格的な始動が始まった、5人。

その先に待つ運命とは！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8962p/>

世界一の王とハッピーアイランド物語

2011年1月9日07時56分発行